



がんばっぺ! 気仙沼



がんばっぺ
気仙沼
応援団

発行日 2011年7月20日
第1巻 第2号
発行 共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

被災地との交流、本格始動!



気仙沼を中心とした東日本大震災の被災地と大阪のNPOを連携させながら、救援・復興に向けた活動を展開していくことを目指している被災者支援の会は、7月、被災地から相次いでゲストを招き、シンポジウムや交流のイベントを企画している。11、12両日は、気仙沼で発達障が

い児者への支援を行っているネットワーク・オレンジの小野寺美厚代表理事を招聘。写真は、関西NPO支援センターネットワークのスタッフ研修会に参加した小野寺さん(右)と支援の会の事務局長、阪野修さん(右から二人目)。



【最東】141° 40' 31"
【最西】141° 23' 55"
【最南】38° 44' 23"
【最北】39° 00' 10"

気仙沼市について

- 人口:7万3000人余り
- 特産品:海産物が主で、フカヒレ、カツオ、カキ、サンマ、マンボウ、マグロ、アワビ、ウニなど
- 地酒:男山、角星
- 観光スポット:気仙沼大島、徳仙丈山つつじ
- 市の花と鳥:ヤマツツジ、ウミネコ(写真上)

目次:

「心のケア」のシンポジウム開催	2
ネットワークオレンジ代表理事、来阪	2
6月、現地視察レポート	3
復興への歩み	3
メーリングリスト参加のお願い	4
夏の活動予定のお知らせ	4
編集後記	4

府の「新しい公共支援」事業に採択

被災者支援の会は、大阪府の「新しい公共の場づくりのためのモデル事業(震災対応案件)」に応募、7件中トップで採択され、900万円の補助金を受けることが決まった。採択された事業は、「宮城県気仙沼地域と大阪の双方向的な被災者救援・復興支援事業」。広大な被災地域のなかから、これまで活動してきた気仙沼とその周辺地域に限定したうえで、支援の対象も青少年、高齢者や障害者などスペシャルニ-

ズをもつ人々、復興事業の3つに絞り、効果的な支援活動をめざすものだ。今年度の事業の柱は、以下の通り。

- ①気仙沼高校の生徒・教員の大阪への招待
- ②夏休み中のボランティアバスの派遣
- ③気仙沼とその沖合に浮かぶ大島への教育ツアーの実施
- ④気仙沼から複数のゲストを大阪に招いて開催するフォーラムの開催

「震災と心のケア」シンポ共催

被災者支援の会は、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野との共催で、7月13日、梅田サテライトで、「ロサンゼルス・阪神淡路・東日本：震災と心のケアを考える」というテーマのシンポジウムを開催した。

テーマが示すように、3つの震災を通じて心のケアについて考えるためのプログラム。1994年に発生したロサンゼルス地震に関しては、震災後、1年半にわたり連邦危機管理局からの資金でアジア系の人々へのメンタルヘルス・サービスを提供したProject Reboundの責任者だった坂本安子さんにロサンゼルスから参加してもらった。

阪神淡路と東日本については、阪神淡路大震災や東日本大震災で



心のケアの問題に取り組んでいる、大阪府立精神医療センター医務局高度ケア科主任部長の野田哲朗さん。司会は、都市共生社会研究分野の弘田洋二教授で行われた。

興味深かったのは、坂本さんの「目に見える形」を作ることの大切さという指摘だ。心の問題の背景にある失業、家の修復、家族の安否などの問題に対して、少しでも進展

が感じられるような状況をメンタルヘルスの専門家が他のスタッフと連携して作り出すことをいう。こうした被災者のケアに対するチームによる活動の重要性と具体的な手法を訴えていた。

写真は、左から弘田教授、野田さん、坂本さん。

ネットワークオレンジ代表理事 小野寺さん来阪

気仙沼の地で震災に耐えながら一步一步歩み始めた人びとを大阪に招き、交流を深めるプロジェクトの第1弾が、7月10日、11日に取組まれた。

10日夜は、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会創造領域（博士課程）の院生の研究会に参加。11日昼は、関西NPO支援センターネットワークのスタッフ研修会に参加し、関西のNPO活動家と共に「これからの支援」について語り合った。関西のNPO関係者の震災支援を巡る熱き議論は、良きお土産になったことだろう。そして、夜は創造都市研究科都市共生社会研究分野のシンポジウム「震災から4カ月：障がい児者と共に生きる市民によるまちづくりの始動」というテーマで基調報告をお願いした。参加者は、約40名。

知的障がい児者の社会的参加支援事業とまちづくり事業等を担うNPO法人ネットワークオレンジは、港近くの市街地で2つの事業所を津波で被災。しかし、代表理事である小野寺美厚さん（写真・前列中央）は、震災当日夜には

「23日に事業再開」をスタッフに指示した。そして、避難所巡りを続けながら利用者全員の安否を確認し、直前に電気・水が復活という偶然もあり、気仙沼市内で一番早く「事業再開」を果たした。日本・世界各地からネットワークオレンジに送られてくる義捐物資を、障がい児者が「共にごんぼろう」と声掛けしながら配布し、被災者が「ありがとう」と答え、共に支え合う風景が展開されているということだ。

小野寺さんは、フリーマーケットで30万円の資金を蓄

えたことをスタートに、『なつかしの駄菓子屋』を拠点に地域の中で日常的な交流を重ね、障がい者の日中活動サポート事業「地域塾」へと、次々と事業を展開させた。今年1月には「社会イノベーター公志園全国大会」で「審査委員特別賞」を受賞。年間決算額予測4000万円、有給職員15名（震災後新たに6名採用）と成長させている。そして、震災前からの街づくりへ実績を踏まえ、復興に繋がるまちづくりへの企画提案も努力されている。

この遅しきは、双子の息子さんの出産の時から

の生き方に根ざしている。「親として、子どもに残すのはお金ではなく環境である」とする強い信念で、「障がいのある人も、障がいのない人も、みんながまちづくりの主演」を理念に据えている。この理念は、5坪でトイレもない小さな『なつかしの駄菓子屋』時代の経験に基づいていると理解出来た。さまざま催し物を開催することで、障がい児も健常児も入り混じり大人たちも顔を出し、商店街の賑わいを支えるようになり、転居する時には「行かないで」と要望を受けるまでになった。話の中で

「運動」という言葉は出てこない。気仙沼という地の事情も反映しているだろうし、「まちづくり事業」を同時に担うことで、具体的解決に向けて身の丈の事業を次々と起こそうとされている。

6月には、市街地にコミュニティカフェ「チャの木」がオープン。今、被災地では、「被災者が活気づくこと」が大切であり、『笑い』を渴望されている。大阪から気仙沼へ出かける支援として、「チャの木で落語会等を実現させてほしい」と話された。（阪野修）



6月現地視察レポート

被災者支援の会の坂口一美副理事長は、6月6日から8日に石巻・南三陸町、6月14日から19日には気仙沼に入り、現地の視察を行うとともに、会と連携して活動する可能性を探った。以下、その概要をレポートしてもらった。



気仙沼市内は、全体的に落ち着いてきました。大川の瓦礫はだいぶ撤去され美しさを取り戻しつつあります。港周辺は雨や大潮による冠水で通行止め箇所が多くあります。町全体倒壊

家屋の解体や瓦礫の撤去作業を進めて、行方不明者の捜索が優先的に行われています。市内の死亡者が約1000人、今だに行方不明者が約500人といった状況です。

かつお漁に間に合わせるため、魚市場の復旧や海底に沈む船の引き上げが進んでいます。市場は一部綺麗になりましたが、まだまだ、完全に再開されるためには相当の時間がかかりそうです。港ははまだ、瓦礫で埋め尽くされています。



気仙沼ホルモン

大阪府堺市で、海に面したコミュニティカフェパンゲアなどで、気仙沼ホルモンなどを出して、売上げの一部を被災地へというアイデアを聞き、作り方を教わってました。気仙沼ホルモンは、「白もつ」も「赤もつ」も一緒に味噌ニンニクのたれに漬けて込んで焼きます。上の写真の手前の取り皿には、ウスターソースがかかった千切りキャベツがあり、焼かれたホルモンに添えて食べます。



気仙沼市全体では7割、南町では実に100%の飲食店が津波でながされました。商店街の復興に向け、地元飲食店主らは気仙沼港近くに「復興屋台村 気仙沼横丁 (仮称)」をオープンさせる計画です。八戸市の八戸屋台村「みろく横丁」を運営する北のグルメ都市の中居雅博代表がプロデュースを手掛けるなど、全面的な支援に当たっています。

失業対策

また、失業が大きな問題になるなかで、国の予算配分を受け市が実施する緊急雇用対策事業の一部を受託し、気仙沼復興協会が雇用主となって求職者である会員を現場に送るシステムが動いています。しかし、市が直接雇用できる人数には限界があり、個々の人々の雇用に行き着くまで時間がかかるため、民間の機動力を生かせば、多くの人がスムーズに働ける態勢を取ることができるといことで、「登録制で現在200人ほどに仕事を提供。

復興への歩み

市内在住で仕事を無くした人が対象で、ロコミで増えています。時給は900円～1000円程度。事務局でマッチング。現場でコーディネーターとして働くメンバーが市内を回り仕事の需要を掘り起こし、仕事の拡大を図っている」とのことです。仕掛け人は守屋守武さんで、5月の連休に支援の会が北摂つばさ高校の生徒・教員とともに、気仙沼入りした際、現地の状況をガイダンスしてくださった方です。

GANBAARE株式会社

震災で被災した気仙沼を再生するために、水産加工業を営む八葉水産のメンバーと、漁業関係者のエプロンや布製品を手がけていたメンバーが集まり、日々生活できるための仕事を作っていく。地元で生きづく縫製技術を使い、被災した地区の地名が入った帆前掛けの布による頒布(かばん)を作り始めました。毎週金・土・日の三日間お店が開かれています。





**共生社会
東日本地震被災者
救援・支援の会**

〒530-0001
大阪市北区梅田1-1-2-600
大阪駅前第2ビル6階
大阪市立大学大学院創造都市研究科
都市共生社会研究分野
柏木宏研究室気付
E-mail: kashiwagi@gssc.osaka-cu.ac.jp

ご寄付のお願い

振り込み先:

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

▽ゆうちょ銀行からの振り込み
ゆうちょ銀行
記号14180 番号54656361

▽他銀行からゆうちょ銀行への振り込み
店名 四一八(ヨソイチハチ) 店番418
普通貯金 口座番号5465636

**共生社会東日本地震
被災者救援・支援の会とは？**

3月11日の東日本大震災発生直後、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野の教員・院生・修了生を中心に設立された任意団体です。宮城県気仙沼周辺地域の被災者への救援と地域の復興活動を支援するために、大阪でNPO、行政、企業と連携しながら活動を進めています。

危機はチャンス、といわれることがある。今回の大震災は、被災地だけでなく、日本全体にとっても危機的な状況を生んでいる。その一方で、救援や復興を合言葉にこれまで無関係だった人々のつながりが生まれている。本紙の2項で紹介した「震災と心のケア」についてのシンポの参加者、坂本さんもその一例といえる。

ロサンゼルスで30年余り生活されている坂本さんの出身は福島県だ。ご家族や親せきにも被災した人が少なくないという。支援の会のメンバーに被災地でのボランティア活動の可能性について打診。これを受けて、気仙沼で発達障がい児者の就労支援などを行っている、ネットワークオレンジでの活動をアレンジした。

坂本さんがシンポジウムで報告をした前々日の12日、

夏の活動予定のお知らせ

被災者支援の会では、7月末から8月にかけて、以下の3つの活動を行います。ぜひ、ご参加ください。

①シンポジウム「震災と女性」の開催

7月25日(月)午後6時半から、大阪駅前第2ビル6階の文化交流センターで、NPO法人イコールネット仙台の代表理事で、中央防災会議「地方都市等における地震防災のあり方に関する専門調査会」委員の宗片恵美子さんを招いて、被災時における女性のニーズや支援にける課題などについて理解を深めるためのプログラム。都市共生社会研究分野との共催で、参加は無料で、予約も不要です。問い合わせは、info@co-existing.commまで。

②気仙沼高校の生徒・教員13人の来阪、交流活動

5月の連休に気仙沼でのボランティア活動に参加した北摂つばさ高校の生徒・教員が中心になって組織した「がんばろう！つばさネットワーク」の主催による気仙沼高校の生徒13人、教員2人の招待プログラム。被災者支援の会は、共催団体として、8月3日から5日まで、北摂つばさ高校で行われる歓迎会や茨木市福祉文化センターでの報告会に協力します。問い合わせは、snjfi@leto.eonet.ne.jpまで。

③ボランティア・バス派遣事業

8月16日の夕方発、19日到着の行程で、大阪から気仙沼へのボランティア・バスを派遣することにともない、参加者を募集しています。募集は、大人10人、高校生10人。参加費は、食事代や宿泊代などの一部として、大人1万5000円、子ども3000円です。現地での滞在は17、18の両日ですが、ボランティア活動の他、被災地の視察も予定しています。問い合わせは、sakappmm@skyblue.ocn.ne.jpまで。

☆メーリングリスト参加のご案内☆

被災者支援の会では、メーリングリストを作成して、情報の伝達と共有化を図っています。どなたでもお入りいただけますので、ぜひご参加ください。参加申し込みは、以下まで。

SHINKA Junko <shin_casshern@hotmail.com>

編集後記

ネットワークオレンジの代表理事、小野寺美厚さんには、関西NPO支援センターネットワークのスタッフ研修会や大阪市立大学でのシンポジウムでプレゼンをしていただいた。ロサンゼルスと大阪、そして気仙沼。お互い知らないまな過ごしていただろう人々が支援や復興について語り合い、行動を共にしているのである。

支援の会は、大阪府の「新しい公共の場づくりのためのモデル事業(震災対応案件)」に応募、採択された。この事業は、大阪から被災地への一方的な支援ではなく、交流を通じて、被災地から学んでいくことをモットーにしている。坂本さんの事例のように、「これまで無関係だった人々のつながり」から学びあう事業を進めていきたい。(HK)